

2021年1月30日 朝日新聞朝刊 書評

『飯舘村からの挑戦』は、高エネルギー物理学を学んだ著者が、ボランティアや研究者らと「ふくしま再生の会」をつくり、放射線の測定や農林畜産業の再生、生活と地域社会の再生に取り組んできた歩みをつづる。

自然をコントロールできるとは考えず、人間も「自然に内包されている存在であり、自然と共生している」との主張は共感できる。自然との関わり方を誤ると、手ひどい報復を受ける。野生動物が起源のウイルスも同様だ。

未経験の事故で「本当の専門家は皆無」。しかし、本書で紹介されるような測定や除染などの試みで少しずつでも前に進める。次々に困難が起きても黙って対策を立てる住民。こうした努力に為政者も都会で暮らす者も甘えてきたのではないか。長年の原子力政策の結果である事故は、政府や東電、専門家、業界、メディアらによる「集団的・犯罪的人災」。そして、多くの国民の容認があって、従来 of 延長政策が続く。著者は、今後も経済成長や科学技術振興が「錦の御旗」でよいのか問う。

震災も原発事故も10年は区切りではなく、長い道のりの通過点。あのとき出た原子力緊急事態宣言は、いまま解除されていない。

*

評・黒沢大陸（本社大阪編集局長補佐）

*

『飯舘村からの挑戦 自然との共生をめざして』田尾陽一〈著〉ちくま新書 1034円

*

たお・よういち 1941年、神奈川県生まれ。「ふくしま再生の会」理事長。IT企業経営などを経て、福島県飯舘村に移住。